

総 評

近年の入試問題と比較すると、計算問題の出題が少なかった（語句7問、選択18問、計算2問、記述4問、作図1問）。昨年度出題されなかった「音」「イオン」「天体」は、予想通り漏れなく出題された。第二～五問のすべての大問において、二部構成（中間1・2）は見られなくなり、1つの題材を深く考察させるか、複数の題材を融合させるような出題が目立った。昨年度初めて出題された「図表を考察し、根拠を示して説明する記述問題」は今年度も見られ、今後も定常化すると見られる。教科書の内容をただ覚えるだけではなく、「なぜそうなるのか」「なぜそうするのか」という点を説明できるような理解の仕方が重要になる。実戦ゼミで演習量を補い、場数を踏むのが良策である。毎年受験生を苦しめる難度の高い計算問題の出題がなかった分、平均点は昨年度より大きく上がり、61.6点であった。

難易度・出題形式

【第一問】刺激と反応、気体の性質と発生、音の伝達、気象観測と大気の動き〈易〉 36点

記号選択や計算など、さまざまな解答形式で出題されていたが、どの問題も基本事項を問うものがほとんどであり、取り組みやすい。設問2(2)の記述問題は直前特訓ゼミでも扱ったので、記憶に新しかったはず。最後の設問は「陸風・気流・気圧」を同時に考察しなければならなかったが、誤っているものを1つずつ消去していけば問題ない。

【第二問】酸・アルカリの性質と中和〈易～標準〉 16点

設問1～4は教科書レベルであり、取り組みやすい。設問5はイオンの個数に関する問題で、溶液中に含まれるイオンごとに個数の変化をグラフ化しなければ考察が困難であったと思われる。この設問も直前特訓ゼミで扱っていたので、アプローチの仕方を覚えていたならば難なく解けたであろう。

【第三問】月と星座の観察〈易～標準〉 16点

自転と公転による見え方の違いを正しく理解していなければ、正答にたどり着くのは難しい。設問1は時刻の変化に伴う動きのため日周運動を指している。一方、設問3(1)は同時刻での比較のため、天体の公転の影響による見かけ上の動きについて、違いを整理してまとめる力が求められた。設問4では同時刻における30日後の天体の位置を選択するが、月の公転周期とほぼ同じ日数であるため、月の見かけの位置はほとんど変化しないことを見抜けたかどうかのポイントとなる。

【第四問】植物の蒸散〈易〉 16点

実験Ⅰは蒸散量の観察実験として基本パターンに則っている。茎からの蒸散量（＝スズランBの水の減少量）さえ見逃さなければ、設問1～4はどれも基本レベルで解ける。設問5は「葉の付け根と葉先における気孔分布の違い」の図表考察記述問題であったが、昨年度のような複雑さは解消され、考察も記述も易化していたので、手の付けやすい記述問題となった。

【第五問】電流と磁界、物体の運動と力〈易～標準〉 16点

中2・3物理単元から幅広く融合させての出題となった。出題範囲が広い分、設問ごとのひねりはあまり感じられなかった。設問4は平均の速さが最も速くなるものが問われているが、「磁界の中の電流が受ける力が大きい→流れる電流が大きい→回路全体の抵抗が小さい」と解釈できれば、正答の選択肢にたどり着く。設問5は実験結果がなぜそうなるのか中学生には説明がつかず、出題として不適切である可能性が高い。